様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　５ 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００００２２

研究課題名（和文）哲学の勧め及び哲学の歴史と歴史の哲学に関するアリストテレスの第一哲学構想の研究

研究課題名（英文）Aristotle on Exhortation to Philosophy, History of Philosophy and Philosophy of Historiography in Metaphysics Book One

研究代表者
坂下　浩司（Sakashita, Koji）

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：２０３３２７１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、Primavesiの巧みな本文編纂方針による『形而上学』第1巻のギリシア語本文とその全章に付された詳細な注解を消化した現時点で最新の日本語訳と注解を作成したものとなった。注解においては、難読箇所に新たな光が当てられ、特にアリストテレスの「歴史感覚」を疑う論者に対して彼を弁護できる箇所が多数あることが明確になった。通常分離して理解される冒頭の「哲学の勧め」部と、続く「哲学の歴史」部との関係については、ギンズブルグの研究「アリストテレスと歴史、もう一度」に示唆を得て、「知恵ある者となるために万物の第一原因の探求（第一哲学）を勧める」ことと、それを勧告する弁論の関係として捉え直した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在の日本では（世界的にも）アリストテレスは「体系的」で「歴史性」に乏しい哲学者の典型とみなされている。「哲学史」の原型となった『形而上学』第一巻においても彼は自説の正しさの裏付けのため他の哲学者の学説を自説に引きつけすぎ「歴史感覚」が欠如しているとさえ言われてきた。これに対して本研究は、「歴史哲学」における「レトリック」の問題という大きな視野から、それを「修辞学」より古い「弁論術」の伝統に結びつける研究に示唆を得て、アリストテレスにおける「歴史記述」の発生事情を考察した。本研究は、アリストテレスにおける「体系性」と「歴史性」についての社会通念を新たな角度から見直すという学術的意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：This study has produced a new Japanese translation of the Greek text of the first volume of the Metaphysics and the detailed commentaries on all chapters of the text, which were prepared by Primavesi's skillful editing of the text. The commentary sheds new light on difficult passages and makes clear that there are many passages in which Aristotle can defend himself to those who doubt his "historical sense". The relationship between the opening "Exhortation to Philosophy" section (Chapter 1-2) and the following "History of Philosophy" section (Chapter 3-10), which are usually understood separately, was reinterpreted as the relationship between the recommendation of seeking the first causes of all things (first philosophy) in order to be wise and the oratory recommending it, as suggested by Ginzburg's study "Aristotle and History, Again".

研究分野：哲学

キーワード：形而上学　哲学の歴史　歴史哲学　哲学の勧め　存在論　アリストテレス　レートリケーとしての歴史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

アリストテレスの『形而上学』は、彼の理論的哲学の主著であって、英米系分析形而上学にとってであれ、大陸系形而上学にとってであれ、今もなお西洋哲学の根本的枠組みの一つとなっており、数多くの難問が見出されると同時に、現代の難問にもヒントを与えつづけている。

そんな『形而上学』であるが、第一巻（および補足的な小さな第二巻）に限っては、どちらの陣営の現代形而上学にとっても難問を提起していない。

第一巻は、「哲学（ピロソピアー）」――字義的には「知恵（ソピアー）」を「愛し求めること（ピロ＜ピレイン）」――の対象である「知恵」とは何かを述べる第一章から第二章、及び、いわゆる「哲学史」を記述する第三章から第一〇章からなると一般に考えられており、これらは存在論と神学の独特の関係や存在論と論理学の微妙な関係が論じられる第四巻や第六巻ほどには難しいことが述べられてはいないと思われている。

しかし、「知恵とは何か」を述べることと「哲学の歴史」を記述することが、なぜ連続しておこなわれるのか、その二つを連続させることには、いったいどういう内的必然性があるのか、という問題については、必ずしも十分に考察されてきたわけではなかったのである。

２．研究の目的

本研究は、アリストテレスの『形而上学』に関する、二十世紀になってから発見された二つの問い、すなわち、（１）第一巻第一章から第二章が実は彼の初期諸作『哲学の勧め』から取られたにすぎないのではないか、（２）同第三章から第一〇章は、タレスに始まる哲学史の記述の雛形となっているが、それは信用できないのではないか、の考察を目的とする。また、この考察を通じて、現代の「歴史哲学（philosophy of history）」ないし「歴史記述の哲学（philosophy of historiography）」への寄与も行う。

３．研究の方法

以上の二つの問題を、文献学的方法、文書類型的方法、歴史哲学的方法という、従来三つ同時に用いられたことのない方法により攻略する。そのため、『哲学の勧め』であったとされる第一章から第二章が彼の第一哲学（形而上学）構想へ組み込まれた意味を解明し、アリストテレスの「歴史」に関する発言を歴史哲学的に反省して、第三章から第一〇章が、哲学史的知識を得るための源泉となり得ることと、その歴史哲学的意味を明らかにする。最終的な成果として、『形而上学』第一巻の明確な理解が得られる日本語訳と註解を、文献学的反省に基づき作成する。

４．研究成果

本研究は、Primavesi の巧みな本文編纂方針による『形而上学』第 1 巻のギリシア語本文とその全章に付された詳細な注解を消化した現時点で最新の日本語訳と注解を作成したものとなった。注解においては、難読箇所に新たな光が当てられ、特にアリストテレスの「歴史感覚」を疑う論者に対して彼を弁護できる箇所が多数あることが明確になった。通常分離して理解される冒頭の「哲学の勧め」部と、続く「哲学の歴史」部との関係については、ギンズブルグの研究「アリストテレスと歴史、もう一度」に示唆を得て、「知恵ある者となるために万物の第一原因の探求（第一哲学）を勧める」ことと、それを勧告する弁論の関係として捉え直した。第一巻の「万物の第一原因の探求」と、「存在としての存在」の学の関係についても、当初予期していなかったが、新しい知見が得られ、査読付き雑誌に論文が掲載された。

平成 29 年度冬期において、本研究の着想に至るきっかけとなった Primavesi の『形而上学』第一巻のギリシア語本文について、文献学的・写本系統学的問題の論争（Fazzo, S., Aristotle’s *Metaphysics* – Current Research to Reconcile Two Branches of the Tradition, 2016; Golitsis, P., Editing Aristotle’s *Metaphysics*: A Response to Silvia Fazzo’s Critical Appraisal of Oliver Primavesi’s Edition of *Metaphysics Alpha*, 2016）が起きた――これは Bernardinello 1970 と Harlfinger 1979)の研究方針の対立の継続として見ることができる――ため、平成 30 年度にこれに関する論争の調査をし、その研究状況の概観を行った。そして、彼の初期著作『哲学の勧め』（の一部分）であった『形而上学』第一巻第一章および第二章が彼の第一哲学（形而上学）構想へ組み込まれた意味を主として Frede, M., Aristotle’s Account of the Origins of Philosophy, 2004/2008 を手引きとしながら解明し歴史哲学的に研究した。

また、平成 30 年に入手し読んだ Politis, V. and J. Su, The Concept of Ousia in *Metaphysics* Alpha, Beta, and Gamma, 2017 により、従来から認識されていた『形而上学』第一巻と第三巻と関係のみならず、それら二つの巻と第四巻のアリストテレス自身の存在論との密接な連関が明らかとなったので、少なくとも第四巻までを研究の視野に入れるべきであると

考えるに至った。特に文献学的にも非常に困難な問題を内包している第４巻第２章の問題に取り組み、註解論文「アリストテレス『形而上学』第四巻第二章における《オーン・アントローポス》，《ヘイス・アントローポス》，《アントローポス》を用いた議論について：1003b26-32 註解」を完成し発表した。この箇所の問題は、最新の Primavesi 的な観点から見直されることが十分にはなされていなかったので、それがなされたことにはアリストテレス研究上の大きな意義がある。

また、令和２年度、単著の学術論文「『形而上学』第四巻第一章の《存在論》再論――第一巻における「第一の諸原理の探求」にとって第四巻の「存在としての存在」そして「或る自然」とはいったい何だったのか――」にまとめ、査読付き学会誌に投稿し掲載された。この論文について、Zoom によるオンライン形式にて、発表、討論と意見交換を行った。この場において、第一巻における始原の歴史的反省と第四巻の一般的存在論の関係を研究するという方針には新奇性があり興味深いが、両巻の間に第三巻の体系的アポリア（行き詰まり・難問）論もあることを考慮するといっそう研究が進展するのではないかとの助言があり、新しい「知恵の探求（ピロソピアー）」への「勧め（プロトレプティコス）」（第一巻第一章と第二章）・始原の事実的な歴史的反省（第一巻第三章から第一〇章）・体系的なアポリア研究（第三巻）・一般的な存在論（第四巻）、そして第六巻の神学的特殊存在論、の五つの要素からなる、『形而上学』第一巻から第六巻研究のより進んだ構想（言わば「五要素構想」）が得られたが、これには第二巻と第五巻が含まれていなかったため、次のように改訂された。すなわち、（一）「新しい知恵の探求への勧め（「プロトレプティコス（大）」（第一巻第一章から第二章）を「プロトレプティコス（小）」（第二巻）と比較する）と「始原の事実的な歴史的反省」（第一巻第三章から第一〇章）との間の説得の観点からのレートリケー的に内的な関係、（二）体系的なアポリア研究（第三巻）、（三）研究で用いられる諸概念のネットワーキング（第五巻）、（四）一般的な存在論と神学的特殊存在論の結合（第六巻）、の四つの要素からなる、『形而上学』第一巻から第六巻研究の新構想（「四要素構想」）となった。

そして、令和 3 年度から 5 年度にかけて、『形而上学』第一巻全体の新しい日本語訳と詳しい注解が、『アカデミア』に発表された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 坂下浩司	４．巻 第24号
２．論文標題 「アリストテレス『形而上学』Ａ（第一）巻第四章から第七章――訳と注解――」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『アカデミア　人文・自然科学編』	６．最初と最後の頁 279-308
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂下浩司	４．巻 第23号
２．論文標題 「アリストテレス『形而上学』Ａ（第一）巻第一章から第三章――訳と注解――」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『アカデミア　人文・自然科学編』	６．最初と最後の頁 119-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坂下浩司	４．巻 52
２．論文標題 「『形而上学』Γ巻第１章の《存在論》再論――Ａ巻における「第一の諸原理の探求」にとってΓ巻の「存在としての存在」そして「或る自然」とはいったい何だったのか――」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『古代哲学研究　METHODOS』	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂下浩司	４．巻 19
２．論文標題 アリストテレス『形而上学』Γ（第４）巻第２章における《オーン・アントローポス》，《ヘイス・アントローポス》，《アントローポス》を用いた議論について：1003b26-32註解	５．発行年 2020年
３．雑誌名 南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編	６．最初と最後の頁 123-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関